

☀️☁️☀️ 余市町でおこったこんな話 ☁️☔️☁️

余市町でおこったこんな話 その151

余市町の埋もれた歴史等を紹介し、改めて余市町を再認識するコーナーです。

鮮魚の輸送

余市町の漁業者は収穫した魚の鮮度を保つために苦労を重ねてきました。

北海道立中央水産試験場でも、北海道の求めに応じて、水産物の鮮度保持を研究テーマのひとつとして、明治36(1903)年から大正14(1925)年頃、サケ・マスと氷と一緒に保冷して運ぶ試験を実施しました(『北水試百年記念誌』)。

大正から昭和時代にかけて鮮魚の道外輸送が飛躍的に伸びました。背景には、鉄道網が整備されたこと、冷蔵と製氷設備が発達したこと、各地に市場ができてつづったこと、がありまし

大正時代の道内の鉄路での主要貨物発送量を見ると、活鮮魚が大正2(1917)年まで3万台に達したものが、同年以降は4万tと増加しています。昭和の貨車輸送は明治末から、冷蔵設備を備えた貨車が登場する前から行われていました。明治末は「魚運車」と呼ばれた。明治末から昭和にかけて呼ばれた。明治末は「魚運車」と呼ばれた。明治末から昭和にかけて呼ばれた。

昭和に入ってからでし(『北海道鉄道百年史上』)。

水産業に付属する冷蔵庫は、明治32年に鳥取県米子市に出来たのが始まりでした。が、北海道では遅く、昭和7(1932)年に岩内町に初めて設置され、翌年以降、才(雄)、余市町、寿都町が北海道庁に建設に関する申請をしました。余市町の冷蔵庫が完成したのは、同14年のようです(『余市郡漁業協同組合創立百周年記念誌』)。

余市町から生ニシンの貨車輸送が開始されたのは、大正8(1919)年のことでした。冷蔵車ではない貨車によった。青森県と秋田県へ送られました。青森県と秋田県へ送られました。青森県と秋田県へ送られました。

おそらから送ったのは大正8年で、なかつたかと考えます。：(中略)：当時の馬車組合の忙しさといったら戦場のようでした。春になると、まぜ港町から駅まで組合で雪をやりする。地元は勿論、赤井川、仁木、樽は、つめかなり遠方から馬車、小樽は、くまのりです。：(中略)：なにも数百メ、駅かい

今の公民館(当時、大川町1丁目付近)まで続いているの、すから全く壮観でした。そのの冷蔵貨車による輸送ができるのうになり、余市には有名なの供給地として全国的に有名になりました(『余市漁業発達史』)。

それから6年後の大正14年、大川町のある商店主が冷蔵貨車での鮮魚輸送を試みた記録が、前掲書にあります。鮮魚専用で試験だった冷蔵貨車による輸送は、試験の成功を機に、回目は12月16日に行われ、マ(大)18尾、マガク(小)45尾、ブリ20尾が東京の隅田川まで送られました。要した日数は5日間でした。続く2回目(大)15尾が送られました。グ(大)15尾が送られました。グ(大)15尾が送られました。



▲ニシンの貨車積み (『余市水産加工業協同組合史』より)

余市警察署からのお知らせ ～降雪害に注意!!～

<p>例年この時期は、寒暖の差が大きくなり、氷のようになった屋根の雪が落ちてきて下敷きになる、屋根の雪下ろし作業中に転落する、除雪機に巻き込まれるなどの事故が発生し、多くの方が命を落としています。</p> <p>このような事故を防ぐために、次のことに注意しましょう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●屋根の雪は早めに下ろしましょう ●雪下ろしは転落防止の措置を講じましょう ●危険な軒下は歩かないようにしましょう ●除雪機による除雪は安全を確かめながら行いましょう ●雪下ろしは複数人で行いましょう ●雪下ろしをする際は携帯電話を携帯するようにしましょう
---	---

◆問合せ 余市警察署 ☎22-0110